

脱親期の親子関係における「対等性」認識に関する一研究

— 脱親期の母娘の認知データを通して —

本村 めぐみ¹

(2003年1月24日受付, 2003年1月31日受理)

A Study on the Recognition of Equality between the Parents and the Children
in the Post Parental Period: Through the Analysis of the Data

Perceived by the Mother and the Children.

Megumi MOTOMURA¹

要 旨

本研究では、「脱親期」と呼ばれる成人同士の親子関係における「対等性」に着目し、親子間の「対等性」がいかに認識されているかを実証的に把握した。分析データは162名の成人娘とその母親の103名である。主な知見は以下のとおりである。①脱親期の母娘が双方の関係を「対等である」とする理由とは、主に『互いの人格尊重』『互いの存在の必要性』,そして『人生における価値観や目標の固有性』に集約される。母娘が「対等性」を認識する根拠は、必ずしも「二つの間に上下・優劣がない・互いに差がない」「互角な」といった従来のequalityの定義要件のみに依拠しない。②脱親期の母娘においては、親子が明確に「対等である」とするよりも、「対等なところがある」とする層が最も大きい。親子を「対等でない」とする最たる理由は、母娘ともに『親を人生の先輩とみなす認識』であり、親とは生涯、「対等」には成り得ない部分もあるという認識が透視された。この知見は、親子関係が、子の成人とともに「対等な関係」に移行するという従来の仮説を部分的には反証するものであった。

Abstract

This paper attempted to give an attention to the "equality" between the parents and children who are both adult in the post parental period, and to clarify how their recognition of equality in the parent-adult child relations was established. The sample for the analysis was 162 adult daughters and their 103 mothers. The data was collected by the questionnaire method. Main findings are as follows.

1) The causal factors by which to let the mothers and their daughters recognize that they were equal in their relations were as follows: (1) respecting their own individual personality. (2) having their own existence each other, and (3) having their own life-goal and value concept. These findings were supposed to substantiate that the causal factors by which to let them recognize they are equal in their relations were not only grounded on the traditional definable requirements of "equality concept" such as "no difference between two things," "no superiority or inferiority," "not above or below," or "even between two things," and so on.

1 高知女子大学生生活デザイン学科 Department of Lifestyle Design, Faculty of Human Life and Environmental Science, Kochi Women's University

2) The data indicated that, among the respondent of mothers and her adult daughters, many of them mentioned that they had an equal aspect in some of their life-areas rather than that they were totally "equal" in all of their life-areas. The reason why they said they were not exactly "equal" was in their recognition that "the parents were definitely senior in the life course" and that "the children were not capable of being equal with their parents." This findings were supposed to indicate the counter-evidence of the present day proposition that the parent-child relations become an equal one as the child is growing into adult.

キーワード： 脱親期・成人同士の親子関係・対等性の認識

Key words: post parental parent-adult child relations, period, recognition of equality.

1 はじめに

家族の生活周期には、大まかに二つの時期の親子関係が想定される。一つは、子どもが生まれて成長するまでの、いわば親が子どもを養育し、子どもが依存する時期の親子関係である。そして二つめは、子どもが成長・独立して親元を去ったあとの「脱親期」と呼ばれる期間における親子関係である¹⁾。この時期から、親子は「成人同士」としての関係を展開してゆく。この成人同士の親子関係は最終的に老年期に入った親を子どもが扶養・あるいは保護する必要が生じてくる期間へと移行するが、今日の長寿社会においては、いわゆる子の扶養期間と、老親扶養期間との間に、1991年では12.3年という、かつてないほどの長い期間が存在するようになった²⁾。

こうした長寿社会において出現した「中間期」の親子関係研究においては、保護と依存・支配と服従という関係に依拠しない、成人同士が相互の「対等性」を前提にした関係性を構築する可能性が指摘されている³⁾。しかし一方で、成人してもなお、長期に渡って親から世話や経済的援助を甘受する子どもと、そうしたサポート授与の裏側に情緒的な依存願望を秘めた親たちという構図が、中間期の親子関係における今日的な一つの特徴として近年、明らかにされてきている⁴⁾⁵⁾。こうした背景のもと、経済成長時代の終息という今日の社会経済的状況を反映して、成人した子とその親

には、互いが自立し「対等性」を前提とした互恵的な関係が、今日、ますます求められていると言える。

ところが、家族研究において親子の「対等性」が認識されるシステムの実相に着目し、「対等である」という認識がいかなる根拠のもとに成り立ち、そして、それはどのような要因によって規定され、維持されているかは明らかにされていない。そもそも、従来の親子関係研究は、生育期の子どもと親、そして老年期の親とその子どもとの関係という親子関係期間の最初（前期）と最後（後期）に関心を集中させてきた⁶⁾ことから、前述したような養育や扶養の授受関係では捉えきれない「対等性」を基礎とした「中間期」における親子関係研究の重要性が指摘されている³⁾。

今日、成人した親子に求められる「対等性」は、親子がより成熟した相互の連帯と共生を目指してゆく上で理念的にも重要な概念であると思われる。よって、本研究では脱親期の親子における「対等性」の認識を、成人娘とその母親の認知を通して実証的に解明することを目的としている。

本研究は、①親子の「対等性」が認識される基盤を解明するために親子間に対等性が認識される理由・対等性が認識されない理由を探り、②そのような親子間における「対等性」認識がいかなる要因によって規定されるかを分析し、最終的には③「対等性」認識が、一体どのような因果経路を

辿って獲得されるものであるかを検討している。

しかし、本論においては、まず「対等性」認識とは一体いかなる根拠によって成人同士の親子によって規定されるのか、そして、そうした「対等性認識」の規定要因の一つとして年齢や「結婚」の有無といったライフコース変数との関連を提示する。その他の分析結果は別項に委ねるものとする。

2 先行研究の検討

「対等性」とは本来「二つの物事の間上下・優劣のない・互いに差がないこと」「双方が同等であること」との意味を持つ。英語におけるequalityがその訳語にあたるがその意味には「互角の」といった意味のほか、理念的な意味合いの強い「平等の」といった意味も含まれる⁷⁾

このように社会的な人間関係における「対等性」とは互いの「同等性」「同質性」「平等性」などの下位概念によって定義づけることができる。しかし、親子関係は、家族関係のなかでも、とくに血縁による感情融合に支えられた非打算的な関係とされる。そのような性質を持つ親子という関係性のなかで、前述したような「対等性」の性質を親子はどのような形で認識するのかは、親子関係研究においても未だに解明されているとは言えない。

成人同士の親子関係の実態を捉えた体系的な調査は、未だそれほど多くはないが、その幾つかは、親子の「援助交換関係」のあり方によって、その関係性を特徴づけようというものがある³⁾⁸⁾。また、それらは、相互の援助交換関係がライフコー

スに沿った標準的な出来事経験、例えば子の結婚、離家、親役割の獲得といったことによってどのように変化するかという視点よって行われてきた。

たとえば春日井(1997)は、成人した娘とその母親を対象にし、「娘の結婚」「娘の親役割の獲得」という娘の出来事経験が、中期の母娘関係の発達的变化をとらえる指標であることの検証を行い、この母娘間の時間的ズレを伴った共感性(Time-lag Empathy)が、母娘の「対等性」を確立をする契機になるのだろうとの推察を行っている。しかし、ここでは「対等性」それ自体の内容がいかなるものであるかは、実証的に明らかにはされていない。

また、従来の多くの親子関係研究が「母娘関係」に限定されてきたことを鑑みると、特に成人娘は「父親」との関係においてどのような契機を指標に「対等性」を認識するのかを解明する余地があると思われる。本論では、成人娘とその父親との関係について、娘の認知を通じたデータではあるが提示してゆきたい。

3 方法

本論では、脱親期の母娘の対等性認識がいかなる理由と根拠に依るものかを明らかにしたうえで、そのような対等性認識が、「年齢」や「結婚の有無」「出産の経験」といったライフコース変数によってどのように影響を受けるかを探る。

(1) 分析枠組み

分析枠組みは以下の図1に示すとおりである。

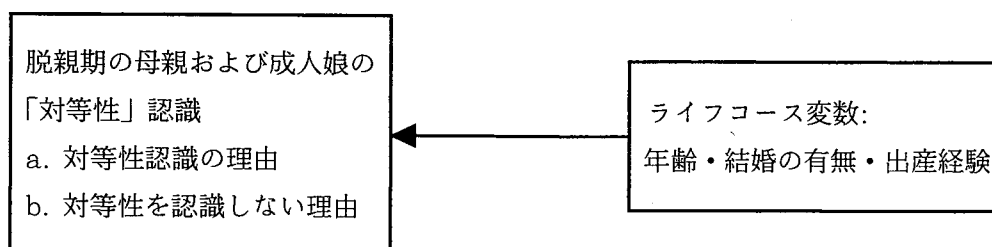


図1 脱親期の親子の「対等性認識」の分析枠組み

(2) 調査の手続き

調査の手続きと概要については、以下の表1に示すとおりである。

表1 調査概要

対象者	兵庫県K女子大学の卒業生 調査時に23歳～57歳にあった成人娘とその母親
抽出方法	同窓会名簿から等間隔抽出による
調査期間	2001年12月に、郵送留め置き調査を実施
有効回収率	27% (162票) そのうち103票は母娘の親子ペアで回収

成人娘の主な属性を記しておく。年齢は20歳代が3割程度、30歳と40歳代が20%、そして50歳代が26.7%という構成になっている。既婚者は67.7%であり、未婚者が28.6%を占める。世帯のタイプとしては、「両親と未婚の子ども」という形態が最も多く、一人暮らしの経験は7割の人が「ない」と回答している。学歴としては、短大卒業が48.4%、大学卒が46%である。「現在収入のある仕事をしている」人はおよそ6割で、職種は「常用勤務」が約55%であり、続いて2割ほどが臨時勤務である。自分の収入と両親世帯との収入を比較すると「自分の方が多い」が33%、「両親世帯が多い」が48.4%という経済状況である。

一方、父親・母親の属性は以下のとおりであるが、これは娘のアンケートから回答を得たものである。父親の年齢は、50歳代が3割、60歳代が35.3%、70歳代が23.6%、80歳代以上が10.9%であった。母親の場合、年齢は50歳代がおよそ4割、60歳代と70歳代以上がそれぞれ、約3割を占めていた。両親の居住形態は、対象者である娘との同居が約3割であり、続いて夫婦ふたり暮らしが約26%を占めている。父親は半数が収入ある仕事に現在も就いており、母親も約3割が何らかの収入ある仕事に就いている。

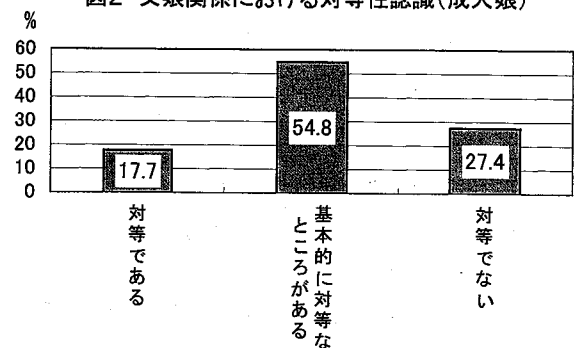
① 対等性の認識

本論では、親子の対等性認識に関して、「対等である」「基本的には対等なところがある」「対等ではない」の3つの選択肢より回答を得ることにした。まず、対等性認識の程度について述べる。

a. 「対等性」認識の程度

成人娘が父親との関係において「対等である」と回答したのは17.7%であり、「基本的には対等なところがある」と回答したのは父娘関係においても最も多く、54.8%であった。「対等である」「基本的には対等なところがある」とした人を合わせる72.5%であった(N=162)。そして「対等でない」と回答した人は27.4%であった(図2)。

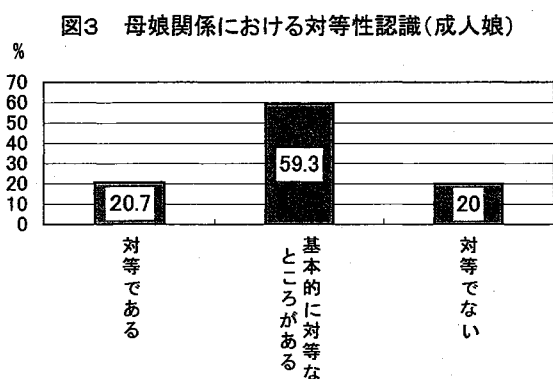
図2 父娘関係における対等性認識(成人娘)



4 結果と考察

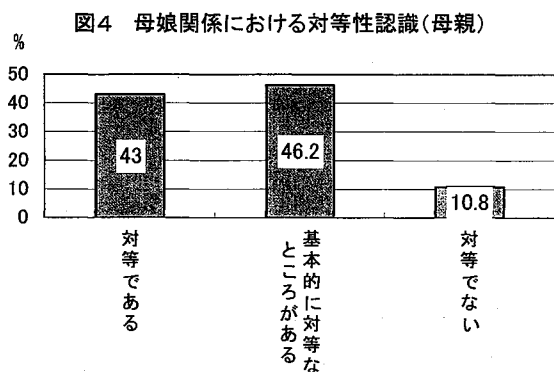
(1) 対等性の認識と認識理由

次に成人娘が母親との関係において「対等である」と回答したのは20.7%、「基本的には対等なところがある」と回答した人は最も多く59.3%であり、この「対等であると感じる」「基本的には対等なところがある」を合わせれば80%という結果になった(N=162)。そして「対等でない」と回答した人は20%であった(図3)。



以上の結果より、成人娘は父親との関係においてよりも、若干ではあるが、母親との関係においての方が対等性を認識する傾向が見られる。

また、脱親期の母親が娘との関係について「対等である」と回答したのは43%であり、この数値は、娘が父親・母親との関係において「対等である」と回答したよりも2倍以上であった。また、母親の場合、「基本的には対等なところがある」と回答したのは46.2%であり、「対等でない」と回答したのが10.8%であった(図4)。

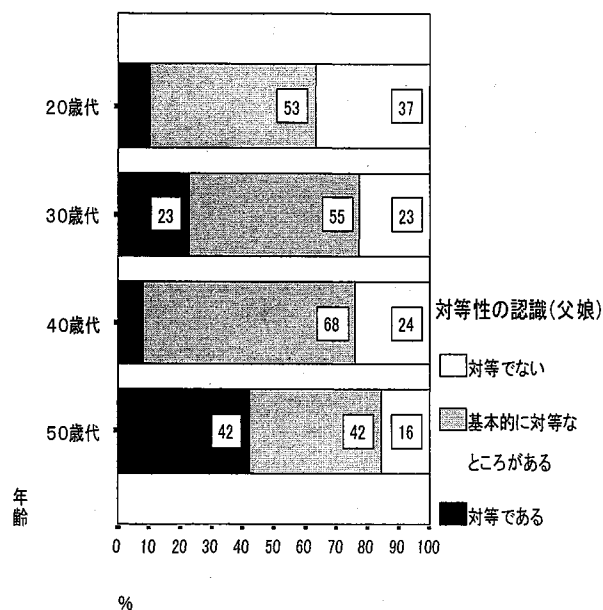


これらの結果より、脱親期の母と成人娘が「対等である」と明確に認識するケースはそれほど多いとは言えないが、完全に「対等である」と言えなくとも、多くのひとは「基本的には対等なところがある」と認識しているということが示された。また、脱親期の母娘関係において「対等性」を見いだしているのは、娘よりも母親の方が明らかに多いことが分かった。

b. 年齢別・結婚の有無別にみた「対等性」認識

親子関係における「対等性」認識を対象者の「年齢」別に検討したところ、成人娘の年齢と、父親との関係において成人娘が認識する「対等性」との間に有意な関連が見られた(p<.05)。図5に示すとおり、父親との関係を「対等である」とするのは、50歳代において最も多く、続いては30歳代が多くなっている。

図5 成人娘の年齢別に見た父親との関係における「対等性」認識



一方、母親との関係において成人娘が認識する「対等性」は娘の年齢とは有意な関連は見られず、20歳代~40歳代の人々は「対等である」と認識する程度が極めて似通っている(20歳代:16%, 30歳代:21%, 40歳代:18%)。しかし、50歳代では「対等である」とする人は全体の28%となり、他の年齢層に比べると若干多い。

母親の年齢別（50歳代・60歳代・70歳代）にも、娘との関係における母親の対等性認識を検討したが有意な関連は見られなかった。母親の場合は50歳代～70歳代のどの年齢層においても、42%～45%の人が娘と対等性を認識しており、年齢による認識の差違がほとんど見られなかったことが特徴である。

このように、年齢という変数は、成人娘の場合、とくに父親との対等性認識において関連が深く、母娘関係においては年齢は「対等性」の認識とは関連が見られなかった。しかし、成人娘は50歳代という年齢において、最も父親・母親との間に対等性を認識することがうかがえた。

なお、成人子の場合には結婚の有無と、出産の経験の有無によって親子間の対等性認識がどのように異なるかの関連も検討したが、本研究によっては有意な関連は発見されなかった。例えば、子どもを持つという経験は、対等性認識と関連するライフコース変数の一つかと思われたが、今回の分析では直接的な影響は抽出されなかった。しかし、この点については質的な調査により今後、さらなる分析は必要であると思われる。

② 対等性認識の理由

「対等性を認識する理由」については、「相互の経済的自立」「相互の精神的支え合い」「互いの人格尊重」「価値観の固有性」「意見交換における平等性」「相互援助交換関係の認識」「家族役割の遂行」「互いの存在の必要性」「互いの社会貢献の認識」の9つの側面を象徴するような項目によって測定した。具体的には表2、表3に示してある項目のとおりである。これらの項目について、親子が「対等である」「対等なところがある」と回答した人に「大変そう思う（4点）」「そう思う（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「思わない（1点）」の4件法にて回答を得た。

「対等性を認識しない理由」は7項目あり、表2、表3に示すとおりである。主に「子の依存の認識」「親の依存の認識」、意志決定場面における

「子の意見の強さ」「親の意見の強さ」、そのほかに「世帯収入の差」「社会的地位の差」、そして「親を人生の先輩とする認識」などを、親子が「対等でない」とする理由として挙げている。これらの項目について、親子が「対等でない」と回答した人に、「大変そう思う（4点）」「そう思う（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「思わない（1点）」の4件法にて回答を得た。

a. 成人娘の対等性認識の理由と、対等性を認識しない理由

表2は、9項目設定した「対等性認識」の理由がそれぞれ獲得した平均点を示してある。まず、成人娘が母親との関係において対等性を認識する理由として、高い平均点を獲得した項目の上位3位は、「お互いを必要な存在と認めあっているから」という『互いの存在の必要性』、「成人した一人の人間としてお互いの人格を尊重しあっているから」という『互いの人格尊重』であり、また、「互いに言いたいことや言うべきことを言い合えるから」という『意見交換における平等性』であった。

一方、成人娘が父親との関係において対等性を認識する理由の上位3位は、順に『互いの人格尊重』、『互いの存在の必要性』の二つに加え、「それぞれが独立した価値観や目標を持って暮らしているから」という『価値観の固有性』が挙げられた。

また、成人娘が父親、母親いずれの関係においても「対等性」を認識しない理由の上位二つは「親は幾つになっても人生の先輩として子どもである自分に与えてくれるものが多いから」という『親を人生の先輩とする認識』と、「子どもである自分のほうが親に頼っていることが多いから」という『子の依存の認識』であった。特に父親との対等性を認識しない理由としては、「社会における職業的地位に差があると感じるから」という『職業的地位の差』が比較的高い平均値を獲得している。

表2 成人娘が父親・母親と「対等である」と思う理由と「対等でない」と思う理由の平均値 N=162

		平均値	
		父娘関係	母娘関係
対等である理由	親も子ども両方とも経済的に自立しているから	2.95	2.91
	互いが精神的に支え合っていると思うから	2.97	3.23
	成人した一人の人間として、お互いの人格を尊重しあっているから	3.28	3.30
	それぞれが独立した価値観や目標を持って暮らしているから	3.24	3.23
	互いに言いたいことや、言うべきことを言い合えるから	3.04	3.27
	お互いに自分のできることを相手に与え合っていると思うから	2.74	2.99
	お互いに家族としての役割を果たしているから	3.03	3.19
	お互いを必要な存在だと認め合っているから	3.25	3.38
対等でない理由	それぞれが社会において役割を持ち、社会に貢献しているから	2.90	2.90
	子どもである自分の方が親に頼っていることが多いから	2.95	2.94
	親から受ける援助よりも、子どもである自分が与える援助の方が多いため	1.29	1.48
	親は幾つになっても人生の先輩として子どもである自分に与えてくれるものが多いから	3.18	3.20
	親の意見に子どもである自分は逆えないから	2.01	1.96
	子どもである自分の意見に親は従うことが多いから	1.51	1.58
	互いに世帯収入に差があるから	2.09	1.84
	社会における職業的な地位に差があると感じるから	2.18	1.78

b. 脱親期の母親の対等性認識の理由と、対等性を認識しない理由

脱親期の母親が対等性を認識する理由の上位2つは、『互いの人格尊重』『互いの存在の必要性』であり、これらは、成人娘の認識と同様であった。しかし、母親の場合は『相互の経済的自立』が3番目に高い平均値を獲得していた(表3)。この『相互の経済的自立』は、成人娘の認識における対等性認識理由としては、それほど高く支持されていないにもかかわらず、母親は『互いの経

済的自立』を娘との対等性認識の理由として高く支持していたことは特徴的であった。

一方、母親が娘との間に対等性を認識しない理由は「子どもの方が親に頼っていることが多いから」「親からの援助のほうが多いから」などの『子の依存の認識』のほかに「親は幾つになっても人生の先輩として子どもに与えるものが多いから」という『親を人生の先輩とする認識』であった。これらは内容的には、成人娘が親との間に対等性を認識しない理由とほぼ同様であった。

表3 脱親期の母親が成人娘と「対等である」と思う理由と「対等でない」と思う理由の平均値 N=103

		平均値
対等である理由	親も子ども両方とも経済的に自立しているから	3.30
	互いが精神的に支え合っていると思うから	3.26
	成人した一人の人間として、お互いの人格を尊重しあっているから	3.36
	それぞれが独立した価値観や目標を持って暮らしているから	3.22
	互いに言いたいことや、言うべきことを言い合えるから	3.27
	お互いに自分のできることを相手に与え合っていると思うから	3.13
	お互いに家族としての役割を果たしているから	3.20
	お互いを必要な存在だと認め合っているから	3.31
対等でない理由	それぞれが社会において役割を持ち、社会に貢献しているから	2.80
	子どもの方が親に頼っていることが多いから	2.76
	子から受ける援助よりも親である自分から与える援助の方が多いため	2.75
	親は幾つになっても人生の先輩として子どもに与えるものが多いから	2.52
	親の意見に子どもが従うことが多いから	2.03
	子どもの意見に親が従うことが多いから	1.91
	互いに世帯収入に差があるから	2.23
	社会における職業的な地位に差があると感じるから	1.84

(2) 対等性認識の理由とライフコース変数との関連

成人娘に注目すると、対等性を認識する理由は「年齢」や「結婚の有無」といったライフコース変数によっても差異が見られた。なお、母親における娘との対等性認識と「年齢」の間には、有意な関連が見られなかった。しかし、有意な関連がある傾向が見られた項目はあり、それは『相互の経済的自立』であった。50歳代、60歳代、70歳代の母親のなかでも、最も『相互の経済的自立』によって娘との対等性を認識するのは70歳代の母親であった ($p < .10$)。

表4は、年齢によって成人娘が対等性を認識する、及び認識しない各理由の支持のされ方がいかに異なるかを平均値の差によって見るために、一元配置分散分析を行った結果である。表には、年齢別に有意差が見られた、あるいはその傾向が見られた「対等性認識の理由」及び「対等性を認識しない理由」の項目を掲載した。同様に、表5は、成人娘の「結婚の有無」と「対等性認識」の理由及び「対等性を認識しない理由」との関連を示しているが、なかでも有意であった項目および有意な傾向があった項目を掲載している。

① 父娘関係

まず、年齢別に有意な差が見られた「対等性を認識する理由」の項目に注目すると(表4)、父娘関係においては「それぞれが社会において役割を持ち、社会に貢献しているから」という『互いの社会貢献の認識』を最も対等性認識の理由として支持しているのは40歳代の成人娘である傾向が見られた。また、『相互の精神的支え合い』を父親との対等性認識の理由として最も支持しているのは40歳代の娘である傾向があった ($p < .10$)。そして「相互の経済的自立」を父親との対等性認識として最も支持する傾向があったのは50歳代の娘であった ($p < .10$)。

一方、「対等性を認識しない理由」としては、「親から受ける援助よりも子どもである自分から

与える援助の方が多いから」という『親の依存の認識』が50歳代の娘によって最も支持されていた ($p < .000$)。

では、「結婚」をしているのか、していないのかの違いと「対等性を認識する理由」との間にはどんな関連があるだろうか(表5)。父娘関係に注目すると、『相互の経済的自立』『相互の精神的支え合い』『価値観の固有性』『意見交換における平等性』の4項目について、未婚よりも結婚している成人娘のほうが、これらを父親との対等性認識の理由として、より支持していることが分かった ($p < .001$)。一方、子側の方が親に頼っている(『子の依存の認識』)ゆえに「対等性」を認識しない、とするのは、既婚者よりも未婚者であった ($p < .05$)。

② 母娘関係

また、表4によれば母娘関係においては「親も子ども両方とも経済的に自立しているから」という『互いの経済的自立』を最も対等性認識の理由として支持しているのが、50歳代の成人娘であることが分かった ($p < .05$)。そして、「お互いに自分ができることを相手に与え合っているから」という『相互援助関係の認識』を母親との対等性認識の理由として最も支持する傾向があるのも50歳代の娘であった ($p < .10$)。

一方、成人娘が母親と「対等性を認識しない理由」としても、『親の依存の認識』と「子どもである自分の意見に従うことが多いから」という『子の意見の強さ』が50歳代娘によって最も支持されていた ($p < .01$)。反対に「子どもである自分の方が親に頼っているから」という『子の依存の認識』を対等性を認識しない理由として最も支持しているのが、20歳代の成人娘であることが分かった ($p < .000$)。そして、成人してもなお『親を人生の先輩とする認識』によって親とは対等と見なさないとするのは、特に40歳代の成人娘において最も多く見られた ($p < .01$)。

では、次に結婚の有無別に見てみる(表5)。

表4 成人娘の年齢別にみた「対等性認識」の理由と、「対等性を認識しない」理由への共感度

対等性認識の理由	対等性認識の理由	年齢	度数	平均値	標準偏差	F値	有意確率	
対等性認識の理由	父娘関係	親も子も経済的に自立しているから	20歳代	33	2.758	1.032	2.30	0.08
			30歳代	23	2.696	1.146		
			40歳代	18	3.222	0.808		
			50歳代	17	3.353	0.862		
			合計	91	2.945	1.015		
	父娘関係	互いが精神的に支え合っていると思うから	20歳代	33	2.727	1.039	2.42	0.07
			30歳代	23	2.870	0.815		
			40歳代	19	3.368	0.597		
			50歳代	17	3.118	0.857		
			合計	92	2.967	0.895		
	父娘関係	それぞれが社会において役割を持ち、社会に貢献しているから	20歳代	33	3.000	0.829	2.05	0.10
			30歳代	22	2.955	0.785		
			40歳代	19	3.053	0.705		
			50歳代	17	2.471	0.874		
			合計	91	2.901	0.817		
母娘関係	親も子も両方とも経済的に自立しているから	20歳代	36	2.722	1.059	2.73	0.05	
		30歳代	26	2.577	1.065			
		40歳代	24	3.125	1.035			
		50歳代	25	3.280	0.936			
		合計	111	2.901	1.053			
母娘関係	お互いに自分ができることを相手に与え合っているから	20歳代	36	3.056	0.715	2.61	0.06	
		30歳代	26	2.615	0.752			
		40歳代	24	3.083	1.018			
		50歳代	25	3.200	0.764			
		合計	111	2.991	0.826			
対等性を認識しない理由	父娘関係	親から受ける援助よりも、子どもである自分から与える援助の方が多いため	20歳代	34	1.147	0.359	6.60	0.00
			30歳代	19	1.263	0.452		
			40歳代	15	1.333	0.488		
			50歳代	7	2.000	0.816		
			合計	75	1.293	0.514		
	母娘関係	子どもである自分の方が親に頼っているから	20歳代	29	3.310	0.761	8.35	0.00
			30歳代	21	3.286	0.845		
			40歳代	17	2.824	1.237		
			50歳代	15	1.867	1.187		
			合計	82	2.939	1.104		
	母娘関係	親から受ける援助よりも、子どもである自分から与える援助の方が多いため	20歳代	29	1.241	0.511	6.96	0.00
			30歳代	20	1.250	0.444		
			40歳代	17	1.471	0.874		
			50歳代	15	2.267	1.223		
			合計	81	1.481	0.838		
母娘関係	親は幾つになっても人生の先輩として子どもである自分に与えてくれるものが多いと思うから	20歳代	29	3.310	0.806	2.72	0.05	
		30歳代	20	3.350	0.875			
		40歳代	17	3.353	0.931			
		50歳代	15	2.600	1.056			
		合計	81	3.198	0.928			
母娘関係	子どもである自分の意見に親は従うことが多いから	20歳代	29	1.586	0.733	4.21	0.01	
		30歳代	20	1.450	0.510			
		40歳代	16	1.250	0.447			
		50歳代	15	2.067	0.884			
		合計	80	1.575	0.708			

表5 成人娘の「結婚の有無」別にみた「対等性認識」の理由と「対等性を認識しない」理由への共感度

対等性認識の理由	父娘関係			度数	平均値	標準偏差	F値	有意確率
対等性認識の理由	父娘関係	親も子どもも経済的に自立しているから	結婚している	59	3.254	0.863	18.61	0.00
			未婚	32	2.375	1.040		
			合計	91	2.945	1.015		
		互いが精神的に支え合っていると思うから	結婚している	60	3.200	0.755	13.21	0.00
			未婚	32	2.531	0.983		
			合計	92	2.967	0.895		
	それぞれが独立した価値観や目標を持って暮らしているから	結婚している	59	3.373	0.641	6.14	0.02	
		未婚	32	3.000	0.762			
		合計	91	3.242	0.705			
	互いが言いたいことや言うべきこと言い合えるから	結婚している	60	3.200	0.732	6.38	0.01	
		未婚	32	2.750	0.950			
		合計	92	3.043	0.837			
母娘関係	親も子どもも両方とも経済的に自立しているから	結婚している	75	3.133	0.963	11.06	0.00	
		未婚	37	2.459	1.095			
		合計	112	2.911	1.053			
	それぞれが独立した価値観や目標を持って暮らしているから	結婚している	74	3.351	0.607	8.78	0.00	
		未婚	37	2.973	0.687			
		合計	111	3.225	0.656			
対等性認識しない理由	父娘関係	子どもである自分の方が親に頼っているから	結婚している	49	2.776	1.026	4.19	0.04
			未婚	28	3.250	0.887		
			合計	77	2.948	0.999		
	母娘関係	子どもである自分の方が親に頼っているから	結婚している	57	2.737	1.158	6.71	0.01
			未婚	25	3.400	0.816		
			合計	82	2.939	1.104		

母娘関係においても、『相互の経済的自立』『価値観の固有性』に2項目について、結婚の有無によって有意な差異がみられ、未婚者よりは既婚者のほうがよりこれら二つの項目を母親との対等性認識の理由として支持する ($p < .000$)。そして、やはり父娘関係の場合で見たのと同様に、子が親に対する依存を認めているゆえに(『子の依存の認識』)母親と対等性を認識しないとするのは、既婚者よりも未婚者であることが分かった ($p < .001$)。

以上の結果より「年齢」や「結婚」といったライフコース変数と親子の対等性認識との関連を概観してみる。年齢について言えることは、年齢と有意に関連のある対等性認識および対等性を認識しない理由の項目が幾つかあったが、それらの理由を根拠として最も支持するのは、50歳代、続いて40歳代の成人娘であった。なかでも、50歳代娘の対等性認識の根拠は幾つか設定した項目のなかでも、一つは『相互の経済的自立』という、より客観的な指標によるものであった。また、『相互

援助関係の認識』や『親の依存の認識』『子の意見の強さ』などが特に50歳代娘によって支持される親との対等性認識、及び対等性を認識しない理由であった。これらは親子相互の「精神的な支え合い」や、「価値観の固有性」、あるいは「人格尊重」といった抽象度が高い「対等性」を説明する理由や根拠に比べると、より具体性の高い項目群と言える。

以上の結果は、「互いの精神的支え合い」や「人格尊重」といった精神的な対等性が、親子関係という人間関係において、より基本的なものであり、それらをベースとして、年齢が高まるほどに、より明確で具体的な「対等性」が築かれる可能性を示唆しているように思われる。

「対等性」認識の理由には年齢や結婚の有無によって相違が見られるが、『相互の経済的自立』や『相互援助関係の認識』に加え、親子の勢力関係の逆転、つまりは『親の依存の認識』が基盤となって築かれるような親子関係における対等性を押し進める変数は、「年齢」や「結婚」というラ

ライフコース変数であると言える。

一方、今日のようなモラトリアム時代においては、人生において、かつて標準的であった「離家」、「結婚」、「経済的独立」、「出産」といった出来事経験が標準とは言えなくなってきた。これらは経験する時機も順番も決まったものではない今日においては、親子の対等性認識に関連する「ライフコース変数」以外の変数もまた、検討される必要がある。

5 まとめと考察

- (1) 脱親期の母娘が双方の関係を「対等である」とする理由とは、『互いの人格尊重』『互いの存在の必要性』に集約されると言える。つまり、成人娘が親との対等性を認識する際には、必ずしも同等のものを所有することや、同質の事柄を達成すること、あるいは同等の社会的地位を獲得し、同質の役割を遂行することなどの要件以上に、互いの「人格的平等」や「存在の必要性」、そして「人生における価値観や目標が独自にある」、といった理由がより重視されていることが解明された。
- これらの結果により、脱親期の母娘における「対等性」の認識は、「二つの物事の間には上下・優劣のない・互いに差がないこと」という「対等」の本来の意味を越えて、むしろ、親子のあいだに上下や優劣や差異が存在していたとしても、親と子が「対等性」を築くベースとなる「平等性」や個人の「固有性」を認め合うことによって生じ得るものなのではないか、という考察がなされる。
- (2) 父娘関係、母娘関係における「対等性」認識の相違は以下のようなものであった。すなわち、成人娘によれば母親と対等性を認識する理由としては、前述した『互いの人格尊重』と『互いの存在の必要性』に続いては、『意見交換における平等性』が挙げられ、同様に、父親との関係においては『価値観の固有性』が挙げられていた。

「それぞれが独立した価値観や目標を持って暮らしているから」という父親との関係における対等性を認識する理由は、親子の「個の確立」や「分離意識」といった側面が重視されていることが推察された。一方、母親との関係においては「言いたいことを自由・平等に言い合える」というコミュニケーションの活発さが対等性認識のベースとなっている様子がうかがえた。

- (3) 「親子が対等でない」とする理由の一つとして、『親を人生の先輩とみなす認識』が母娘の双方によって高く支持された。
- つまり、時を経ても親は人生における先人であるゆえに、子どもとは同じ位置にはあらず、それゆえに対等ではない、という親子関係観は、親子関係が子の成人とともに「対等な関係性」に移行するという従来の仮説に議論の余地を与えるものであった。こうした脱親期の母娘が保持している意識が、親子を明確に「対等である」と規定するよりも、「基本的には対等なところがある」とする認識、つまりは、親とは生涯、「対等」には成り得ない部分もあるという認識をもたらす所以ではないかと考えられる。
- (4) 「対等性」が認識される程度、そして「対等性」が認識される理由や根拠は、「年齢」や「結婚の有無」といったライフコース変数と関連が見られた。また、親子関係における、より実質的な「対等な関係」、すなわち「精神的な支え合い」や「経済的自立」を基盤として、「相互の援助関係の樹立」が可能となる成人娘の年代として、50歳代が目された⁹⁾。これらの結果によって、脱親期の親子における「対等性」は、「中期」の親子関係のみに見られる関係性でなく、親の老年期になる「後期」にまで継続して認識されるものであることが示唆される。

注および、参考文献

- 1) 大橋薫・西村洋子,1985,「親子関係変容の社会的要因」岡・小倉他編『親子関係の理論② 家族と社会』岩崎学術出版社,49-79。
- 2) 「ライフサイクルの変化」,1993,厚生省, 393。
- 3) 春日井典子,1996,「中期親子関係における共有体験—母娘間の感情次元の分析を中心に—」『家族社会学研究』第8号,139。
- 4) 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘,1997,『未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣。
- 5) 宮本みち子,2001,「膨れすぎた「ポスト青年期」—若者たちは崖っぷちに立っている—」『論座』朝日新聞社,85-96。
- 6) Hagestadt, G.O., 1987, "Parent-Child Relations in Later Life: Trends and Gaps in Past Research," in Lancaster, J.B., Altmann, J., Rossi, A.S., & Sherrod, L.R.(eds.), Parenting across the Life Span: Bio social Dimensions, Aldine de Gruyter Publications, N.Y.,405-433.
- 7) 『新辞林』『類語実用辞典』『デイリーコンサイス和英辞典』,以上は三省堂。ほかに、『岩波国語辞典第六版』岩波書店の「対等」の意味を参照。equalityの意味としてはLongman dictionary of contemporary English., Longman, 1987.
- 8) 保田時男,2001,「交換理論アプローチから見た中期親子の相互援助関係—大阪府茨木市における中期親子調査の結果から」第11回日本家族社会学会大会。
- 9) 本研究で行った「年齢」による認識の相違の背景には、加齢効果、コーホート効果、時代効果が考えられる。しかし、厳密にはこれらの効果を分離して分析することは困難である。本研究における分析はそうした意味において「年齢階級別分析」の結果に対してコーホートの概念を用いながら仮説的な考察を行ったものである。今後はより柔軟に様々な仮説を立てながら分析を進めることが出来るような年齢別・時系列データを用いながら考察を行っていく。